

モダンリビング

Modern Living No. 100 May. 1995

婦人画報社

特集 災害にも強い住まいづくりを考えた

からだに優しい 健康住宅



心もからだもリラックス

健康な暮らしを手に入れる

健康的生活宣言

気持ちのよいバスルームでのんびり・ゆったり

快適なベッドルームで心地よく眠る

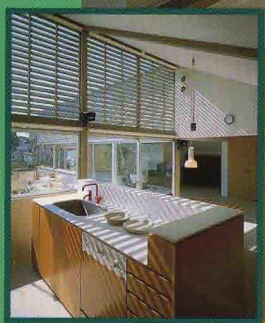
自然のエネルギーをわが家へ

こんなふうに住らせたなら幸せ

理想のヘルシーライフ

健康住宅SPECIAL

災害に強い家をつくる



◎モダンリビング

大判化100号記念特別企画

私のインテリア

私が設計した住まい

大募集



こんなふうに住らせたなら幸せ 理想のヘルシーライフ

太陽の光とさわやかな風、そして緑が満ちあふれたすてきな暮らし。
自分の好きなものだけに囲まれて穏やかな時間を過ごす、本当にリラックスできる空間。
それぞれに夢のある理想的なライフスタイルを4人のクリエイターの方々に、
イラストやお菓子、お花などで表現していただきました。

地中に広がる楽園、 快樂主義者の自然と共存する生活

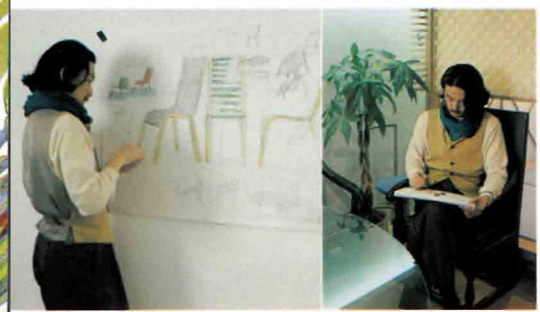
大塚ノリユキ インテリアデザイナー



1960年、福井県生まれ。1981年、東京デザイナー学院卒業後、ヨーロッパ遊学。プラスチックスタジオ&アソシエイツを経て、1989年、大塚ノリユキデザイン事務所設立。

僕はいつも同じ風景の夢を見る。それはゆったりとした丘の雑木林の中、庭球場ぐらゐの広さだろうか、ほっかりと緑の芝生が生い茂る空間がある。晴れた日には風に舞う羽毛のような花粉が飛び交い、雨降りるときは水滴がすべてを優しく包み込む。僕はいつも一人でこの風景の中にいる。ここには時間という観念がないのだから、鳥の声も虫の音も聞こえない。いつもあるのは光輝く緑の芝生。あるいは水気を含んだ濃い芝生。これが僕の心の風景だ。

現在、神奈川県多摩川に近い丘の上に住んでいる。ここは都心から1時間圏内という場所にもかかわらず、まだ手つかずの自然がいっぱい残っている。裏山に行けばバードウォッチングはもとより、小動物などにも遭遇できる。植物の宝庫でもあり、僕はよく草木を摘みに行く。先ごろも陶芸家である知人の個展のお祝いにカラスウリを両抱えに摘んできた。赤く実ったカラスウリはとても愛らしく彼の作品をよりよく引き立てていた。このように優しい場所なのだ。近ごろは丘を切り崩して宅地化が進んでいる。草木が無残にも切り倒されているのを目にするのは余りにも忍びがたい。自然と人間が共存できる理想郷は僕たちの手でできないものか...とふと思う。



▲・▲ラフスケッチをする大塚さん。作品をつくるときはいつも壁に大きな紙を貼って描くとか。ここでイメージをつかんでから、細かいディテールが決まってくる。

現実に戻ると僕は建築の内部空間をデザインするという仕事で、床、壁、天井を任意で設定して最良の空間を創造する。その空間は最低限必要とされるエレメントで構成された形ではなく、無の創造となる。形とは外郭におけるミニメンタリティーであるのに対し、無は人が内部空間のディメンションを感じるチカラを必要とする。そして僕の夢の住宅は、形を持たない住宅、つまり無の創造から始まるのだ。

与えられた敷地に住宅は見えない。唯一あるのは展望台と地下に延びる階段だけ。「これが住宅？」と思うだろうが、とにかく設置してある展望台にぜひ登っていただきたい。丘の向こうに見える河川や緑もゆる木々、芝生は陽の光を受けて輝いている。そう、住宅はこの足元にあるのだ。地殻と一体化したフォルムに地表となっているルーフ、これは地中に埋設された住宅だ。ほっかりと穴が開いている部分には地中のパティオとなり一日中太陽の光が降り注ぐ。庭では自然の泉が湧き出し、水面の輝きが反射して部屋の天井に光の波紋を映し出す。地上の小川はガラスの川底を持ちトップライトとなる。その光やせせらぎが室内に伝わり地中という観念がなくなるだろう。パイパー、マルメロ、オレンジなどの果実はパティオに楽園的な色彩と空気を滲ませる。僕はここでくつろぎ、もぎたての果実を頬張りながら読書をし至福の時を過ごすのだ。

人間は有史より自然と対峙し、知恵を絞り社会を形成してきた。文明を築くためには自然を征服しなければならず現在の病めた風景となった。その代償としてあちらこちらで歪みが出てはいないだろうか。そろそろ考えを改めて人間が一步引いた形で自然と共存するデザインを考えるころだ。人間が本来の姿に戻り、とても優しく自然体になりえる楽園は、わざわざ短い休暇を取つて南の島に行かなくとも僕たちの足元にあるのだ。

僕の家に遊びに来ないか、そして展望台に登って耳に手をかざしてみよう。小さなささやきが聞こえてくるはずだから。それは鳥のさえずりか、それとも風の歌なのか、あるいは僕たちの心の声なのかもしれない。



撮影/関博

◀自然と共存するような生活がしたい、という大塚さんの夢の住宅。草木が溢れるその足元をのぞけば、楽園のようなパティオが広がる。

▶1994年、ミニマムスペースの提案をした個展「風景の彼方に」より、インテリアを独立させた作品「PLEATS BOX」撮影/平井広行

